

台場公園

児玉 寛嗣

新橋からゆりかもめに乗り芝浦ふ頭で下車、レインボーブリッジを歩いて渡った。橋の上からは高層ビル群が見渡せる。シヨッピングモールなどで賑わうお台場に近づくと、眼下に台場公園が見える。黒船の来航に海防の必要を感じた幕府が軍艦を迎え撃つために設置した台場（砲台）のひとつで、埋め立てによる人工島である。湾の外に向けた二基の砲台跡をはじめ、中央のくぼ地には兵舎の礎石、火薬庫の跡等が残っている。工事は急ピッチで進められ翌年の二度目の来航時には既に一部が完成していたとのこと。黒船来航のシヨックがいかに大きかったかを物語っている。

黒船が来航した時にはその十数年前に中国で起こったアヘン戦争の情報が伝わっていた。戦争に敗れた中国（清）は不利な条約を西欧諸国と次々に結ばされて、中華人民共和国の建国までの「屈辱の百年」が始まったのだった。

これを目の当たりにしていた日本の知識人たちは西洋諸国の脅威がいかに大きいかを自覚していた。幕府は砲撃によって江戸を火の海とされることはなんとしても避けたかったため、品川沖に台場を急遽設置した。当時の幕府の必死の思いが伝わってくる。しかし、二度目の来航で恫喝にも似たアメリカの態度に屈し日米和親条約を結び、下田と函館の開港を約束させられて鎖国の終焉となった。そのため、この台場の出番はなかった。

異国に屈したと幕府を非難し外敵を撃つべし、幕府から朝廷に政権を戻すべしという尊王攘夷の声、開国派、幕府を支持する声と八手の巢を突いたように国内は騒然となった。その後十数年の幕末の激動の時代を経て、明治維新を迎えた。明治に入ってからには西洋文明を積極的に取り入れて富国強兵の道を行っていった。それを考えるとこの台場は近代日本の始まりを知る生き証人だ。大正十五年「品川台場」として国の史跡に指定されたのはその所以であろう。近くの浜辺に遊ぶ若者たちはこの台場の歴史を果たして知っているのだろうか。